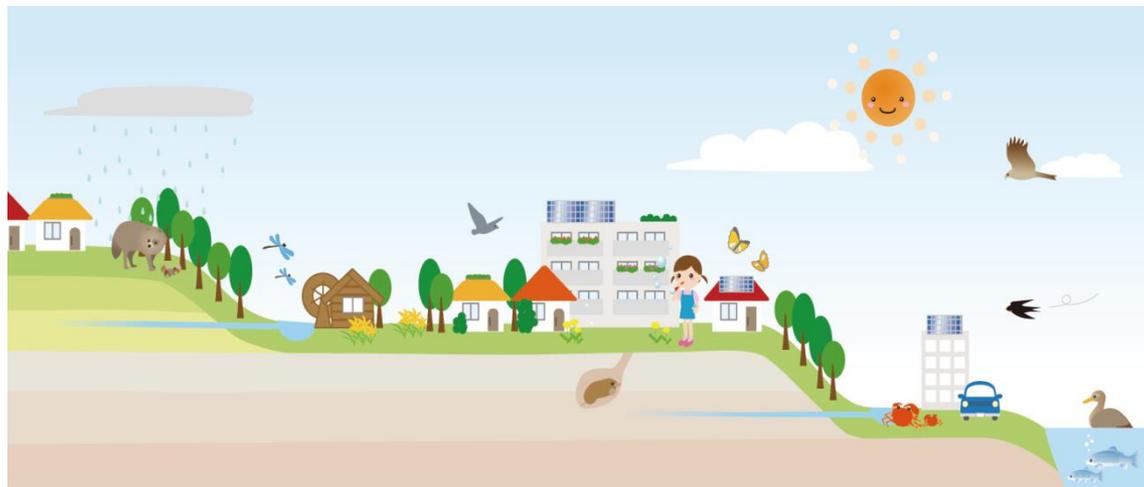


府中事業所 いきものガイド



東芝インフラシステムズ(株)府中事業所
2017年7月1日

本資料について

1. 本資料は、事業所内に生息する生き物を紹介する東芝グループ従業員向けの教育資料です。
2. 生き物の紹介は、主に、構内で見られる時期や頻度などを中心に記載しています。
3. 紹介している生き物の種に、網羅性はありません。
希少種、もっともよく見られる普通種、目立つ種をランダムに掲載しています。
4. 本資料に記載してある希少性については、基本的には東京都レッドデータを根拠としています。

【東京都レッドデータ】

絶滅危惧ⅠA類（CR）	ごく近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高いもの
絶滅危惧ⅠB類（EN）	近い将来における野生での絶滅の危険性が高いもの
絶滅危惧Ⅱ類（VU）	絶滅の危機が増大している種
準絶滅危惧（NT）	存続基盤が脆弱な種
情報不足（DD）	評価するだけの情報が不足している種



府中エリアの紹介 その1

府中エリアは、多摩川の中流域に位置します。多摩川と、昔の多摩川の名残である野川の間であり、川や湧水、都立公園が多い、自然豊かな土地柄です。

武蔵野の森が今に残る「浅間山（せんげんやま）」、都内では珍しい湿原「矢川緑地」など、貴重なビオトープ（生物生息空間）を多数有しており、それらは、地域の“緑の核”の役割を果たしています。

そんな中、東芝府中事業所は、緑の核と核をつなぐ、中継地点となる緑地の整備を目標としています。



緑地と緑地をつないで、生き物たちが行き来できるようにする（イメージ図）

府中エリアの紹介 その2

断面図で見てみましょう。昔の多摩川の流れが作った、国分寺崖線と立川崖線（府中崖線）があり、その下側からはあちこちに湧水が見られます。その湧水の一部は府中用水に利用され、田畑を潤しています。

府中エリアの断面図（イメージ）



このエリアには、樹林や河川、田んぼや果樹園もありますが、最も多いのは住宅地や工業用地です。

工場や学校がたくさんあることから、“緑の核”と“緑の核”をつなぐ企業・学校ビオトープの設置により、エコロジカル・ネットワーク（生態系ネットワーク、緑の回廊）の構築が可能です。東芝府中事業所が積極的にビオトープ情報を公開している理由も、ここにあります。

府中事業所の紹介

府中事業所は約70ヘクタール、東京ドーム14個分の広さがあり、緑地面積の合計は11万m²を超える大きな事業所です。写真で見ると、建物がいっぱい、あまり生き物なんていなそうに見えますが・・・ちょっと意識して見てみると、そこには、たくさんの生き物が生息しています。このガイドブックで、その一部をご紹介します。



絶滅の恐れがある生き物たち②

「生物多様性」に関する種々の取り組みが行われる一方で、多くの生きものたちが絶滅の危機に瀕しており、生態系のバランスが崩れることが懸念されます。東京都では、**1,579種が、レッドリストに掲載**されています。

分類群	掲載種数
植物	800
哺乳類	37
鳥類	162
爬虫類	14
両生類	15
淡水魚類	38
昆虫類	394
甲殻類	15
クモ類	33
貝類	71
合計	1,579

分類別では…

1,579種がレッドリストに掲載されていますが、分類群ごとに見ると左表のようになります。

植物では、800種が掲載されていますが、うち北多摩地区の掲載数は351種です。

鳥類では、162種のうち、北多摩地区は121種です。

昆虫では、394種のうち、北多摩地区は231種です。

分類群	掲載種数
トンボ目	59
カマキリ目	3
バッタ目	28
カメムシ目	19
ヘビトンボ目	5
アミメカゲロウ目	1
コウチュウ目	195
ハチ目	15
ハエ目	12
チョウ目チョウ類	50
チョウ目ガ類	7
合計	394

昆虫類の内訳は…

昆虫394種の内訳は、左表になります。

コウチュウ目では195種がレッドリスト掲載種ですが、うち108種が北多摩地区の掲載数です。

【レッドリストにおける絶滅危惧ランク区分】

- 絶滅 (EX) 絶滅が確認されたもの
- 野生絶滅 (EW) 飼育されているが野生では絶滅したもの
- 絶滅危惧 I A 類 (CR) ごく近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高いもの
- 絶滅危惧 I B 類 (EN) 近い将来における野生での絶滅の危険性が高いもの
- 絶滅危惧 II 類 (VU) 絶滅の危機が増大している種
- 準絶滅危惧 (NT) 存続基盤が脆弱な種
- 情報不足 (DD) 評価するだけの情報が不足している種

府中事業所で見られる絶滅危惧種の例



生態系ピラミッドとは？

府中事業所における生態系ピラミッド



食べる・食べられるというつながりを、「**食物連鎖**」といい、生き物は、この**かかわりあいの中で生きています**。

また、生産、消費、分解を繰り返す生物圏の状態を「**生態系ピラミッド**」として図式化することができます。この生態系ピラミッドは、**底辺に行けばい**
くほど個体数が多くなることでバランスが保たれており、どこかでバランスが崩れると、次々と上位の生物に影響し、人間の生存基盤である生物圏全体のバランスを崩す作用となる可能性があります。

府中事業所の生態系ピラミッドの頂点に立つのは、哺乳類のタヌキやハクビシン、ハヤブサなどの猛禽類です。

府中事業所のいきもの解説

【哺乳類・鳥類】

府中事業所構内の生態系の頂点に立つのは、タヌキやハヤブサです。タヌキは、一年を通し、夜間に現れます。ハヤブサなどの猛禽類は、秋・冬に多く見られ、食痕も多く見つけましたが、春・夏にはあまり見かけません。

鳥類は、41種を確認。ムクドリ、ヒヨドリ、オナガ、スズメ、シジュウカラ、メジロ、コゲラ、ハクセキレイなど、都市部に適応している小鳥を多くみかけます。野川・多摩川などの河川が近いことから、構内上空をコチドリやキアシシギが飛ぶ姿も見られました。

猛禽類では、北西緑地でハヤブサが隣接する鉄塔にとまっている姿を確認。同じく北西緑地で、チョウゲンボウの左翼の初列風切り羽が落ちていたことから、この2種は事業所内を利用している可能性が高いと思われます。また、ハイタカ、サシバ、ツミ、ノスリは、上空を通過する姿が確認されました。希少種では、ウグイス、ヒバリ、セグロセキレイ、モズ、エナガ、イカルが確認されています。

【爬虫類】

ヒガシニホトカゲ、ニホンカナヘビ（両種とも絶滅危惧Ⅱ類）を確認。都会で減りつつある種が、事業所の緑地にひそやかに生息し、街中の環境改善を待っている現状を感じます。

【昆虫類】

昆虫類は473種を確認。バッタなどの草地性の種と、カネタタキなど植栽樹木に生息する種が多い特徴があります。東京都レッドデータ該当種が6種確認されており、特に絶滅危惧Ⅱ類のショウリヨウバッタモドキは確認地点数、生息数とも多く、府中事業所を代表する昆虫と言えます。

蝶類は20種が確認されています。ウマノスズクサ（絶滅危惧Ⅱ類）を食草とするジャコウアゲハについては構内での繁殖が多数確認されており、ショウリヨウバッタモドキとともに府中事業所を代表する昆虫です。

2012年3月に小さな水辺ビオトープ（トンボ池）を設置しましたが、その後半年間、日向・止水を好むトンボがひっきりなしに訪れました。初年度は、通りすがりのノシメトンボ、オニヤンマを含め、合計12種類を確認。ヤゴやその抜け殻も多数確認しました。ただし、池の大きさから考え、生き物は飽和状態にあると思われ、トンボの種・数は減っていくことが予想されます。2014年度は、全国的に減少が危惧されているアキアカネ、ミヤマアカネはほとんど見られませんでした。

【植物】

植物は368種が確認されましたが、現状では手入れされた修景緑地がほとんどであることから、特徴的な自然の植生はほとんど見られません。

東京都レッドデータ該当種は3種を確認。うちウマノスズクサ（絶滅危惧Ⅱ類）は構内のいたるところで見られます。アマドコロ（絶滅危惧Ⅱ類）とヒロハハナヤスリ（絶滅危惧ⅠB類）は局所的です。

タンポポは、セイヨウタンポポに押され減りつつあるカントウタンポポが多数見られることが特徴ですが、近年、中間的な雑種が多く見られるようになりました。

府中事業所のいきものたち

府中事業所に生息する生き物たちを、写真でご紹介します。
ちょっと意識して探してみてください。街中のごく身近なところに、こんなにたくさんの生き物がいるのです！

【哺乳類】



タヌキ (イヌ科)

写真：2011-11-29

一年を通し、夜間カメラで確認された。
ため糞、足跡、けもの道、抜け穴等、フィールドサインがあちこちで見られる。



ハクビシン (ジャコウネコ科)

写真：2012-10-24

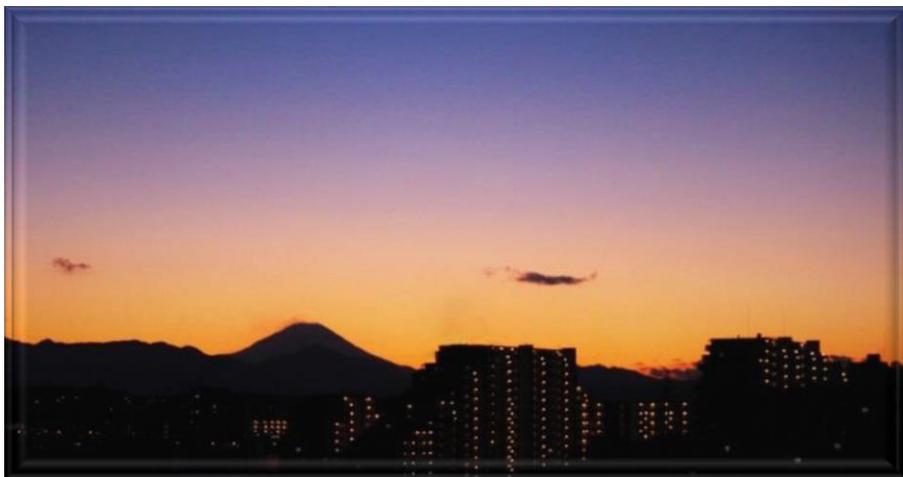
近年は、住宅の屋根裏などで繁殖し問題となっている。
夜行性。
写真は、事業所のほぼ中央の食堂脇で撮られた。



アズマモグラ (モグラ科) のモグラ塚

写真：2012-09-21

モグラ塚は、なぜか事業所南側に多い。
下草が無い冬季に観察しやすい。



梅林にて。モグラ塚が50個以上ありました。(2013-02-20)



ハヤブサ (ハヤブサ科)

写真：2012-09-21

生息地の破壊、農薬による汚染などにより生息数が減少しており、「種の保存法」により国内希少野生動物植物種に指定されている。
冬季から春季にかけて、探餌(たんじ)及び休息に事業所を利用している。

○絶滅危惧Ⅱ類 (VU)



ハシブトガラス (カラス科)

写真：2011-06-10

ハシボソガラスがガーガーと濁った声で鳴くのに対し、カーカーと高い声で鳴く。
事業所では、ハシボソガラスが多く、ハシブトガラスは滅多に見かけない。



サシバ (タカ科)

写真：2012-05-01

サシバは、夏に飛来し、秋には沖縄・南西諸島を経由して東南アジアやニューギニアで冬を越す。
サシバは、事業所の上空を通過するのみで、事業場の直接の利用は確認されていない。

○絶滅危惧ⅠA類 (CR)



ヒバリ (ヒバリ科)

写真：2014-06-21

春に空高く舞う歌の名手。
この近辺では、確認できない年があるほど、数が減っている。

○絶滅危惧Ⅱ類 (VU)



チョウゲンボウ (左翼の初列風切り羽)

写真：2012-07-04

チョウゲンボウの羽が北西緑地に落ちていたことから、事業所の直接利用が推測される。
ハイタカやツミ、ノスリやチョウゲンボウについては、周辺地域では飛翔中に採餌している姿が確認されているが、事業所内の直接利用は確認できなかった。



ヒヨドリ (ヒヨドリ科)

写真：2012-12-04

一年中、どこで見られる普通種。
ムクドリと同じぐらいの大きさ。頭のとっぺんがボサボサしていることが多い。



猛禽類の食痕 (コガモの羽)

写真：2012-02-02

猛禽類の食痕がたまに見られる。餌となった種でこれまでに確認されたのは、コガモ、ドバト、キジバト、ヒヨドリ、オナガの5種。
(うち、コガモは事業所内には生息していない。)



ムクドリ (ムクドリ科)

写真：2012-06-04

一年中、どこでも見られる普通種。
頬の白い模様の入り方や体の色(黒～褐色)に個体差がある。
6月、芝生を埋め尽くす大群の中に、たくさんの幼鳥が見られた。



ハシボソガラス (カラス科)

写真：2014-04-20

ガー、ガーと濁った声で鳴く。
構内の木の上には、木の枝やハンガーで作った巣が見られる。
構内ではこのカラスが圧倒的に多い。



巣(2014-03-15)



ムクドリの親子 (2012-06-15)



顔の白い面積が大きく体が褐色 (2012-10-16)



体が黒い (2012-06-04)



オナガ (カラス科)

写真：2012-12-11

府中事業所では、一年中、普通に見られる鳥。
 黒いベレー帽とブルーグレーの長い尾がお洒落だが、カラスの仲間で、声は美声とは言い難い。
 秋に、親鳥が巣立ち雛（写真右下）に餌を運ぶ様子が観察できた。



2013-01-21



巣立ち雛に餌を運ぶ (2012-09-26)



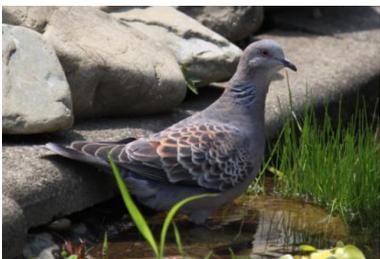
巣立ち雛 (2012-09-26)



カルガモ (カモ科)

写真：2014-04-22

府中事業所に初めて降り立った水鳥。
 池や芝地で、休息・探餌している様子。
 2015年度からは、池にてコサギも観測されている。



キジバト (ハト科)

写真：2012-05-28

キジのメスに体色が似ていることからこの名前がついた。
 朝、電線にとまったキジバトがさえずるメロディー「デデーポッポー」は、なかなか情緒的。



ドバト (ハト科)

写真：2012-05-28

カラバトを家禽化したものが再び野生化したもの。
 色・柄は個体差が激しい。

○日本の侵略的外来種ワースト100



ハクセキレイ (セキレイ科)

写真：2012-06-04

一年中、どこでも見られる普通種。左の写真は夏羽で黒いが、冬は褐色に変化する（特にメス）。



幼鳥 (2012-06-15)



冬羽 (2013-02-01)



セグロキレイ (セキレイ科)

写真：2013-04-17

4月中旬から一か月以上姿を見せた。渡りの途中に立ち寄っただけと思われる。日本固有種。

○準絶滅危惧 (NT)



スズメ (ハタオリドリ科)

写真：2012-06-04

一年中、どこでも見られる普通種。
 建屋の屋根裏などに巣をつくり、構内で繁殖している。



シジュウカラ (シジュウカラ科)

写真：2012-04-11

一年中、どこでも見られる普通種。
 トレードマークの黒いネクタイは、太さに個体差がある。一般的に、オスの方がメスのものより太い。
 春先、「ツツピーツツピー」とよく響く声でさえずる。構内で繁殖。



シジュウカラのメス



メジロ (メジロ科)

写真：2012-12-05

一年中構内で見られる。
 虫も木の実も花の蜜も好き。機敏で素早い。
 花が咲いて真っ先に来る鳥は、たいていメジロだ。



カワラヒワ (アトリ科)

写真: 2011-11-28

留鳥。
肌色で太めのくちばし、翼と尾にある黄色の斑が特徴。
尾がM字形で、愛称は“M尾くん”。



アオジ (ホオジロ科)

写真: 2014-01-24

冬鳥。
オスは頭部が灰青色で、
眼先や喉が黒い。
事業所では数が少なく、
あまり見かけない。



コゲラ (キツキ科)

写真: 2013-02-01

留鳥。
英名は "Japanese Pygmy Woodpecker"。
スズメサイズの小型のキツキ。府中事業所
の中で、ドラミング (キツキが木を叩く音) が
聞こえたら、このコゲラ。
近年、都市部でも普通に見られる鳥と
なっている。



ジョウビタキ (ヒタキ科)

写真: 2013-01-21

冬鳥。
一羽でいることが多い。
雄雌異色。



オス



モズ (モズ科)

写真: 2011-11-28

留鳥。
肉食性で、小さな猛禽類と言われ、
小鳥も襲う。クチバシは鋭く尖り、先端
はカギ状に曲がっており、足指の爪も鋭い。
雄雌異色。



○絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

メス(2013-03-26)

オス



シメ (アトリ科)

写真: 2013-02-20

冬鳥。
ムクドリやツグミと一緒に、地面に
落ちている種子などをつついて
姿を見かける。太い嘴で堅い種子
でも割って食べる。
風切羽の青黒色が美しい。



独特の風貌



エナガ (エナガ科)

写真: 2013-01-21

留鳥。
小さな体に長い尾が特徴。
群れで行動している



○準絶滅危惧 (NT)



ツグミ (ツグミ科)

写真: 2013-01-21

冬鳥。
地面を走って、急に止って、ぐっと胸を
反らせて、頭を高くし、辺りを警戒する
行動がよく見られる。
顔や体の模様には個体差がある。



マユ(?)が白い



ツバメ (ツバメ科)

写真: 2012-05-01

夏鳥。
古くから日本では愛されている鳥だが、巣の材料である
「泥」が少なくなったこと等から、都会で減っている鳥。
近くの多摩川にツバメの集団ねぐらがあることで有名。



シロハラ (ツグミ科)

写真: 2012-02-02

冬鳥。
府中事業所ではたまに見られる。



ヒガシホントカゲ (トカゲ科)

構内の全域で見られる。
幼体は尾が鮮やかな青色。

写真：2012-07-24



幼体 (2012-08-01)

○絶滅危惧Ⅱ類 (VU)



ニホンカナヘビ (カナヘビ科)

日本の固有種。
トカゲに比べ、尾が長く、鱗には光沢が無い。

写真：2012-08-06

○絶滅危惧Ⅱ類 (VU)



ショウリョウバッタモドキ (バッタ科)

府中事業所を代表する、絶滅危惧種のバッタ。ススキの草地などに多い。
脚は体に対して短い。人の視線を感じると、跳ねたり飛んだりせず葉の裏側にコソッと回り込む。

写真：2012-09-26

○絶滅危惧Ⅱ類 (VU)



メス・幼虫(2012-08-07)



秋に色づいた個体 (2012-09-04、2012-10-23)



ショウリョウバッタ (バッタ科)

オスの成虫は体長5cm前後で細身だが、メスの成虫は体長8-9cmと巨大。オスはキチキチと音をたてて飛ぶ。ショウリョウバッタモドキよりも足が長い。府中事業所で多いバッタBEST3はショウリョウバッタ、オンブバッタ、ヒナバッタ。

写真：2012-08-01



メス (2012-08-29)



オンブバッタ (バッタ科)

体色は緑色型と褐色型の2タイプがあり、緑色型のほうが多く見られる。

写真：2012-10-23



赤く色づいた個体 (2012-9-21)



ヒナバッタ (バッタ科)

つやのない褐色をした小さなバッタ。腹部の黒い縞模様が目立つ。事業所の中では数が多い。

写真：2012-09-21





トノサマバッタ (バッタ科)

写真：2012-09-26

日本のバッタの仲間では一番大きい。後脚は発達してジャンプ力が高い。



ホシササキリ (キリギリス科)

写真：2012-09-20

体は明るい緑色または褐色。事業所内では、キリギリスは確認されておらず、本種が圧倒的に多い。



クマバッタモドキ (バッタ科)

写真：2012-08-01

クマバッタの褐色型に似るが、本種の背中中は盛り上がりせず真つぐ。クマバッタは事業所では確認されていない。



ツコムシ (キリギリス科)

写真：2014-09-15

9月頃に見られるが、数は少ない。



コバネイナゴ (イナゴ科)

写真：2012-10-16

翅は短く、腹端を越えない場合が多いが、個体差があり長翅型もある。



モリオカメコオロギ (コオロギ科)

写真：2014-09-15

ハラオカメコオロギに極めてよく似ているが、生息環境が異なる。



ツチイナゴ (イナゴ科)

写真：2012-05-16

体長6センチほどもある大きなバッタ。秋に現れ成虫の姿で越冬する。バッタの仲間では、成虫で冬を越すただ一つの種類。眼の下に、まるで泣いているような模様がある。



幼体(2014-8-31)



マダラスズ (ヒバリモドキ科)

写真：2014-09-15

足に白黒のまだらがある。



クビキリギス (キリギリス科)

写真：2012-05-01

真っ赤な口元が特徴的。成虫の姿で冬を越す。



ジャコウアゲハ (アゲハチョウ科)

写真: 2012-05-01

シヨウヨウバッタモドキとともに、府中事業所を代表する昆虫。後翅亜外縁の半月状斑は春型が赤色、夏型は白っぽい黄色になる。メスの翅は、黒色というより褐色。幼虫は**ウマノズクサ (絶滅危惧Ⅱ類 (VU))**しか食べないが、府中事業所では、そのウマノズクサがあちこちで見られる。



卵 (5/16) 幼虫 (5/28) ササ* (6/25) 羽化直後のオス(7/4) 最後に見たメス(9/21) 越冬蛹



キアゲハ (アゲハチョウ科)

写真: 2014-08-31

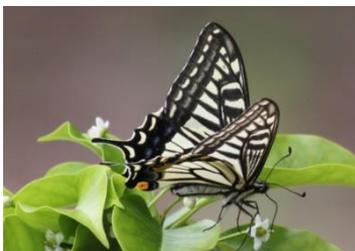
事業所では、成虫を確認したことは無いが、2014年度、2015年に幼虫を確認した。



モンシロチョウ (シロチョウ科)

写真: 2012-06-25

最も頻繁に見かける蝶の一種。幼虫の食草はキャベツやアブラナなどアブラナ科の植物。



ナミアゲハ (アゲハチョウ科)

写真: 2012-07-18

最もよく見られるアゲハチョウ。



若齢幼虫は鳥の糞に擬態?



終齢幼虫



スジグロシロチョウ (シロチョウ科)

写真: 2016-04-06

翅に黒いすじがある。モンシロチョウと間違われていることが多い。



クロアゲハ (アゲハチョウ科)

写真: 2012-07-24

幼虫はミカン科のミカン、カラタチ、ユズ、サンショウなどの葉を食べる。



ツマキチョウ (シロチョウ科)

写真: 2015-04-19

年1回だけ発生する。成虫が見られるのは3~5月の間だけで、あとは幼虫、サナギで過ごす。他のシロチョウに比べて飛び方が直線的。雄は前翅表の先端が黄色で、雌では灰色。



アオシアゲハ (アゲハチョウ科)

写真: 201-09-15

地面で給水する姿を見かける。幼虫の食草は、クスノキ。



モンキチョウ (シロチョウ科)

写真: 2012-11-08

個体差や羽化してからの時間により色が異なる。幼虫はアカツメクサ、シロツメクサなどを食べる。





キタキチョウ (シロチョウ科)

写真：2012-09-21

褐色斑の出方に個体差がある。
秋に羽化したキタキチョウは、
葉陰などで越冬する。



斑がはっきり (2012-11-08)



ヤマトシジミ (シジミチョウ科)

写真：2012-07-09

どこにでも生息するカタバミが幼虫の食草。



オス



メス・夏型



メス・春秋型

(2012-10-23) (2012-10-16) (2013-03-29)



ツバメシジミ (シジミチョウ科)

写真：2012-10-03

後翅に尾状突起があり、ユラユラ動く。
ヤマトシジミと共によく
見られる。幼虫はシロ
ツメクサなどを食べる。



オス (2012-09-26)



メス (2012-09-26)



ヘニシジミ (シジミチョウ科)

写真：2012-05-16

季節によって翅の色合いが変わる。
幼虫の食草はギンギシなど。



ルリシジミ (シジミチョウ科)

写真：2014-06-21

ヤマトシジミより白っぽく、目が黒い(ヤマトシジミは目が
褐色)。ヤマトシジミが草原を低く飛ぶのに対し、木の
上や周りを高く低く飛び回る。幼虫の食草はマメ科、ミズキ
科など。



ウラナシジミ (シジミチョウ科)

写真：2012-09-21

頭部に似た模様をもって敵の目を欺い
ていると考えられている。
後翅に尾状突起があり、ユラユラ動く。
毎年、南から北上してきて、東京で見
られるのは、萩の花が咲く9月頃から。
幼虫の食草は萩などマメ科の植物。



2012-09-26



ウラナミアカシジミ (シジミチョウ科)

写真：2013-06-03

幼虫の食樹は、クヌギ、コナラなど。ゼフィルス類の一種
で、成虫が見られるのは5月～6月と短期間だ。
事業所で確認できたのは2013年度の一匹だけで、植
樹したクヌギ・コナラに卵がついていたものが羽化した可
能性が高い。



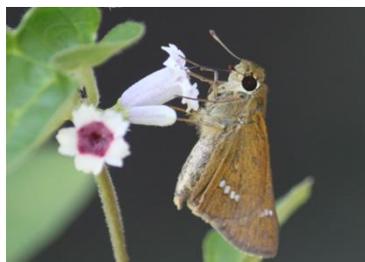
ウラギンシジミ (ウラギンシジミチョウ科)

写真：2012-10-12

成虫のまま越冬する。
幼虫の食草はフジ、クズなど。
花の蜜は好みでないらしく、
花にとまっているところは
ほとんど見ない。



翅の裏は銀色 (2012-08-23)



イチモンジセセリ (セセリチョウ科)

写真：2013-08-20

秋に多く見られる。
後翅裏の銀紋が一文字状に並ぶ。
幼虫の食草はイネ科の植物。



キマダラセセリ (セセリチョウ科)

写真：2014-09-15

オレンジ色～褐色の斑模様を持つセセリチョウ。
幼虫の食草は、ススキなどのイネ科植物、マイコザサな
ど。



メス

ツマグロヒョウモン (タテハチョウ科)

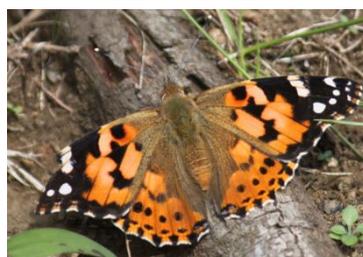
写真: 2012-10-12

もともとは九州、四国などに生息していたが徐々に北上し、近年は関東でも普通種として定着している。幼虫の食草はスミレ類。



オス

裏はヒョウ柄



ヒメアカタテハ (タテハチョウ科)

写真: 2012-10-12

ツマグロヒョウモン、アカタテハに似る。幼虫の食草は幼虫はキク科のハハコグサ、ヨモギなど。



(2012-08-23)



キタテハ (タテハチョウ科)

写真: 2012-11-08

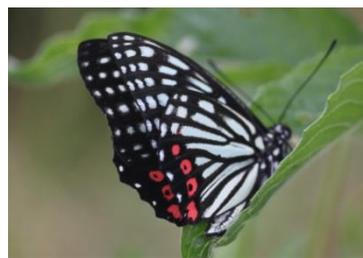
翅の裏側は木の葉のよう。表側は鮮やかな山吹色。秋に羽化したキタキチョウは、成虫のまま葉陰などで越冬する。幼虫の食草はクワ科のカナムグラ。



テングチョウ (タテハチョウ科)

写真: 2014-05-25

顔の先が尖っており、それを天狗の鼻にみたて名前がついた。



アカボシゴマダラ (タテハチョウ科)

写真: 2015-06-29

関東で見られるアカボシゴマダラは、中国から持ち込まれ放たれたものが繁殖しているもの。春型は白い。

○要注意外来生物



白い春型



コムスジ (タテハチョウ科)

写真: 2014-07-19

幼虫の食草はクズやフジなどマメ科植物。成虫はクリの木の花などに集まり吸蜜する。



サトキマダラヒカゲ (タテハチョウ科)

写真: 2014-08-31

曇天の日に現れる。人ととまって、人の汗を吸うことがある。



オオスカシバ (スズメガ科)

写真: 2014-08-31

名前の通り、翅が透明。スズメガの多くは夜に活動するが、本種は昼に活動する。ホバリングしながら花の蜜を吸う。幼虫はクチナシを食草とする。



クロスジギンヤンマ (ヤンマ科)

写真: 2012-05-28

春季種。4月末に一斉に羽化する。胴体横の、黒い筋が目立つ。写真はメスで、オスの腹部には瑠璃色の模様がある。



ギンヤンマ (ヤンマ科)

写真: 2012-08-28

府中事業所では、8月の終わりに見られる。写真はメスで、オスは腹部に空色の模様がある。

9月には、オニヤンマも何度かトンボ池を訪れているが、オニヤンマは流水に産卵するため、通り過ぎていただけ。



オス

シオカラトンボ (トンボ科)

写真：2012-08-01

4月末から羽化する。
オスは青色。メスは麦わら色を
している。たまにメスでも青色が
混じった個体がいる。



メス (2012-07-25)



アキアカネ (トンボ科)

写真：2012-09-26

夏の間、涼しい山の上で過ごし、
9月中旬から姿を里に見せる。
アカトンボの代表種。成熟しても、
頭部や胸部はあまり赤くならない。
2014年度はほとんど見られなかった。
(2012-09-21)



まだ赤くなってない



オス

オオシオカラトンボ (トンボ科)

写真：2012-07-18

シオカラトンボに似るが、オスは
体全体が濃い水色。メスは黄色
と黒。



メス (2012-08-28)



ミヤマアカネ (トンボ科)

写真：2012-09-26

9月中旬から姿を見せる。
田んぼが減ったため都会では少ない種とされるが、府中
は田んぼが多少あるため結構見かける。
成熟すると赤くなり美しい。
2014年度はほとんど見られなかった。



オス

ショウジョウトンボ (トンボ科)

写真：2012-07-04

オスは真っ赤。メスは薄い黄色。
7月初旬から頻繁に姿を見せる。
ショウジョウ (猩々) とは、酒飲み
の妖怪。オスのその赤さから
名付けられた。



メス (2012-08-01)



クロイトトンボ (イトトンボ科)

写真：2012-08-29

写真は、成熟し、粉を吹いたよう
に白くなったオス。



産卵中



マユタテアカネ (トンボ科)

写真：2014-07-19

顔面に黒い眉斑。木陰を好む。羽化した場所からあまり
離れない。
翅の先が黒い
ノシメ型がいる。
秋に赤くなる。



ノシメ型 (2014-07-31) 成熟後 (2014-09-15)



アジアイトトンボ (イトトンボ科)

写真：2012-09-04

アオモンイトトンボによく似ているが、青い紋の位置で見
分ける。アジアイは腹部第9節に紋があり、アオモンは第
8節。
メスはオレンジ色から緑色へと変わる。



ウスバキトンボ (トンボ科)

写真：2012-09-26

7月初旬も現れる。飛翔力が
強く、めったにとまらない。とまる時
には、縦にぶら下がる。
群れを成してブンブン飛び回る。
秋に少し赤くなる。



2012-07-04



アオモンイトトンボ (イトトンボ科)

写真：2014-10-19

アジアイトンボに似ている。
メスはオレンジ色から緑色へ変わる個体と、オスと同色
型がる。



コアオハナムグリ (コガネムシ科)

写真: 2012-05-16

緑色～銅色の体に、白点を散りばめた小さなハナムグリ。春から秋までよく見られる。花粉をムシャムシャ食べながら花の中を前進する姿が楽しい。



ナナホシテントウ (テントウムシ科)

写真: 2012-10-16

ナミテントウと並んで、最も普通に見られるテントウムシ。成虫のまま越冬する。



幼虫



シロテンハナムグリ (コガネムシ科)

写真: 2012-08-23

暗緑色で、光線の具合で色の見え方が違う。たまに緑色に近い個体がある。



ナミテントウ (テントウムシ科)

写真: 2012-09-26

色や斑紋が多様。



これもナミテントウ



マメコガネ (コガネムシ科)

写真: 2013-07-16

小型のコガネムシ。アメリカでは、"Japanese beetle" (ジャパニーズ・ビートル) と呼ばれている。



ダングラテントウ (テントウムシ科)

写真: 2012-10-03

斑紋の入り方に、地域差・個体差がある。



アオドウガネ (コガネムシ科)

写真: 2014-07-19

ずんぐりしていて頭が丸い。よく似たカナブンは頭が四角い。



キイロテントウ (テントウムシ科)

写真: 2016-05-16

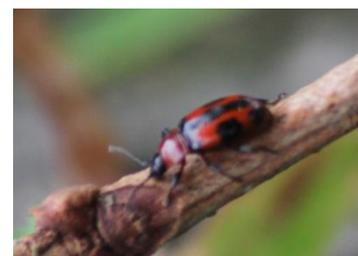
植物につくウドンコ病菌などの菌類を食べるテントウムシ



セマダラコガネ (コガネムシ科)

写真: 2014-07-02

薄茶色と黒色のまだら模様の小さなコガネムシ。体色には変異がある。



ヨツボシテントウダマシ (テントウダマシ科)

写真: 2014-07-19

オレンジ色に黒紋がある小さな甲虫。草やキノコについた菌類を食べる。



ノギリカミキリ (カミキリムシ科)

写真：2012-07-04

写真は、産卵管が飛び出たメス。コーリングといって、オスを雄を誘うフェロモンを発している。府中事業所にいる、数少ないカミキリ類。

○準絶滅危惧 (NT)



ヒゲトハナムグリ (コガネムシ科)

写真：2012-05-16

5月中旬に地上に現れる。発生時期が短いため、見るには運も必要。トナカイのような触覚が目を引く。

○準絶滅危惧 (NT)



コフキゾウムシ (ゾウムシ科)

写真：2012-06-21

クズなどのマメ科の植物の葉を食べる。大きさは5mm程度。



ヒメシロコブゾウムシ (ゾウムシ科)

写真：2012-05-25

ごつごつしたコブがある。関節がオモチャのように見え、かなり独特な姿。



コカマキリ (カマキリ科)

写真：2012-10-29

茶褐色の小ぶりのカマキリ



オオカマキリ (カマキリ科)

写真：2012-10-29

緑色と褐色タイプがある。



オオカマキリの卵のう
(2013-02-01)



ハラビロカマキリの
卵のう (2013-01-21)





エサキモンキツノカメムシ (ツノカメムシ科)
 写真：2012-05-16
 体の中央にハート型の斑紋があるカメムシ。



キマダラカメムシ (カメムシ科)
 写真：2014-10-19
 温暖化で北上中？ 中国原産。



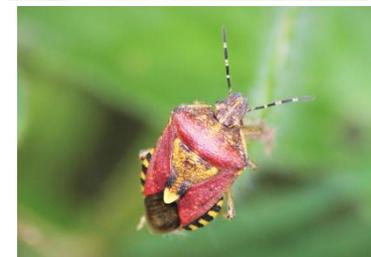
幼体 (2014-8-31)



アカスジカメムシ (カメムシ科)
 写真：2014-08-31
 背中への黒と赤の縞々がスタイリッシュ



クサギカメムシ (カメムシ科)
 写真：2014-07-19
 日本全土に分布



ブチヒゲカメムシ (カメムシ科)
 写真：2014-07-19
 写真は赤と黄色の色が濃い個体。



親と卵：2014-8-8



クヌギカメムシ (カメムシ科)
 写真：2014-11-30
 長い触角の緑色のカメムシ



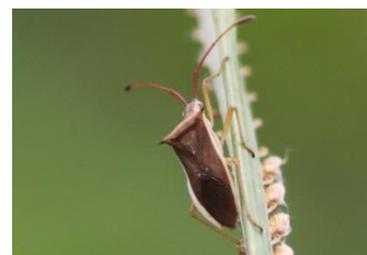
チャバネアオカメムシ (カメムシ科)
 写真：2016-04-06
 写真は茶色味が強いが、名前の通り緑色の体色の個体が基本。



ナガメ (カメムシ科)
 写真：2012-10-29
 「菜の花につく亀虫」を略してナガメ



ルリクチプトカメムシ (カメムシ科)
 写真：2014-07-19
 メタリックな瑠璃色のカメムシ



ホソハリカメムシ (ヘリカメムシ科)
 写真：2014-07-19
 細いカメムシ



ホソヘリカメムシ (ホソカメムシ科)

写真：2014-08-31

後足が長いカメムシ



ニホンミツバチ (ミツバチ科)

写真：2012-11-08

日本在来のミツバチ。
セイウミツバチより黒っぽい。
農薬に弱く、世界一の農薬使用国である日本において、種の存続が心配されている。



ヨコヅナサシガメ (サシガメ科)

写真：2014-12-20

昆虫を刺して体液を吸う。刺されるので触らないこと。外来種で九州～関東に侵入。写真の左上は羽化殻。集団でクスギの幹で越冬中？



セイウミツバチ (ミツバチ科)

写真：2013-4-22

ハチミツを造るためにヨーロッパから持ち込まれた帰化種。



アブラゼミ (セミ科)

写真：2015-08-29

府中事業所で一番多いセミ。



ヒメハナバチの一種 (ヒメハナバチ科)

写真：2016-5-16

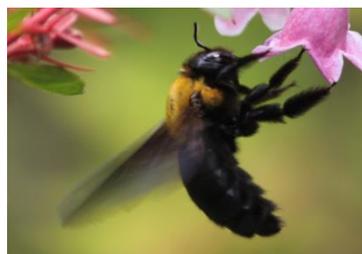
早春期、ミツバチより早く表れる。



ツマグロオオヨコバイ (ヨコバイ科)

写真：2015-05-16

愛称はバナナ虫。植物の汁を吸う。



キムネクマバチ (ミツバチ科)

写真：2014-06-21

ずんぐりとした大きなハチ。ホバリングして花の蜜を吸う。
羽音が大きくびっくりさせられるが、性格はおとなしい。



オオヨコバイ (ヨコバイ科)

写真：2015-05-16

植物の汁を吸う。淡い緑色。



ワケハラカガツバチ (ツバチ科)

写真：2012-10-12

秋口から見られる。
金色の毛が美しい。
写真は触角の短いメス。



金色に輝く



ヒメハラナガツチバチ (ツチバチ科)

写真：2012-07-09

オオアワダチソウの蜜を吸う
ヒメハラナガツチバチ。
メスはまるで姿が違う。
このハチは幼虫の時、地中で
コガネムシ類の幼虫を食べて
育つ。



メス (2012-07-04)



ハグロハバチの幼虫 (ハバチ科)

写真：2012-05-16

幼虫はギシギシなどを食べる。



キオビツチバチ (ツチバチ科)

写真：2015-06-27

幼虫は、コガネムシの幼虫を食べて育つ。



コガタズメバチ (ズメバチ科)

写真：2012-08-23

池の水をよく飲みにくる。



サトジガバチ (ジガバチ科)

写真：2012-07-09

オオアワダチソウの蜜をすうサトジガバチ。
腹部が膨らみ、オレンジ色が目立つ。基部は糸状。
府中事業所には、よく似た種ヤマジガバチはいない。



モンズズメバチ (ズメバチ科)

写真：2015-08-29

セミを好んで狩る。腹部の斑紋が波打つ。



アメリカジガバチ (ジガバチ科)

写真：2012-10-16

名前の通り外来種。
在来種のキゴシジガバチは棒状に細くなった腹部が黄色
。



コアシナガバチ (ズメバチ科)

写真：2012-08-23

キボシアシナガバチと似ているが、キボシの紋は赤褐色だが、本種は腹部に黄色い紋がある。
池の水をよく飲みにくる。



ニホンカブラハバチ (ハバチ科)

写真：2012-10-25

幼虫はダイコン・カブなどのアブラナ科植物の葉を食べる
。



シオヤアブ (ムシヒキアブ科)

写真：2012-07-18

非常に攻撃的とされ、各種の昆虫を頑丈な脚で捕らえ、
その体液を口で吸う。



アメンボ (アメンボ科)

写真：2012-07-18

トノボ池に真っ先にやってきた昆虫。
実はアメンボは空を飛ぶが、翅が
短い短翅型となってしまった個体は
もう飛べない。



短翅型 (2012-11-08)



ヤマトクサカゲロウの幼虫 (左側) (クサカゲロウ科)

写真：2014-07-02

幼虫は、アブラムシなどの小動物を食べる。左の写真は、
ヤマトクサカゲロウの幼虫 (左側) がジャコウアゲハの幼
虫 (右側) を捕食しているところ。



オカダンゴムシ (オカダンゴムシ科)

写真：2015-05-16

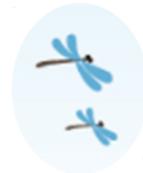
触ると丸くなって身を守る。ワラジムシに似ているが、ワラジ
ムシより黒くつやつやしている。外来種。



ワラジムシ (ワラジムシ科)

写真：2014-01-26

ダンゴムシに似るが、さわっても丸まらず、速足で逃げる。
色はダンゴムシより茶色い。





ウmanoszukusa (ウmanoszukusa科)

写真：2012-07-18

日当たりのよい河川敷などが生息域だが、都会では土地開発により減少している。冬季は地上部は枯れる。府中事業所では全域で見られる。

○絶滅危惧Ⅱ類 (VU)



フキ (キク科)

写真：2014-3-15

フキノトウは初春の代表的な山菜。



アマドコロ (ユリ科)

写真：2013-04-13

中国では、名を乾燥させたものを生薬として使う。府中事業所では局所的に生息する。

○絶滅危惧Ⅱ類 (VU)



ニビル (ユリ科)

写真：2013-11-9

白い球根(鱗茎)は、酢味噌和えやてんぷら、味噌汁の具などでおいしく食べられる。



ヒロハйнаスリ (ハナヤスリ科)

写真：2012-05-10

山地や原野に群生する小型のシダ。春に葉を生じ、夏には地上部は枯れる。府中では一か所に生息している。

○絶滅危惧ⅠB類 (EN)



スギナ (シダ植物) (トクサ科)

写真：2013-03-26

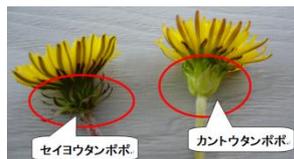
写真はツクシ(ツクシはスギナの胞子体)



カントウタンポポ (キク科)

写真：2012-04-11

府中事業所にはカントウタンポポが多い。萼片が反り返っていない。くもりの日には花を閉じる(セイヨウタンポポは閉じない)



ヨモギ (キク科)

写真：2012-10-03

古来から薬草として使われている。府中事業所でよく見られるヒメアカタテハの幼虫の食草。



ノゲシ (キク科)

写真：2013-03-12

早春から秋口まで咲く。昆虫にとっては花期が長いありがたい花。



オオイヌフグリ (オオバコ科)

写真：2013-02-05

ヨーロッパ原産の帰化植物。2月初旬ごろから咲く、早春の花。府中事業所では、オオイヌフグリ、タチイヌフグリはあるが、在来種のイヌフグリ(絶滅危惧種)は残念ながら本事業所では確認されていない。



ヒメオドリコソウ (シソ科)

写真：2012-04-11

ヨーロッパ原産の帰化植物。
在来種のオドリコソウは、府中市ではほとんど見られなくなっている。



フデリンドウ (リンドウ科)

写真：2015-04-02

府中事業所では唯一(?)のリンドウ科。クヌギ林で春先に見られる。暗くなると花を閉じる。ハルリンドウに似るが、ハルリンドウより乾いた場所に咲く。



ホトケノザ (シソ科)

写真：2013-03-12

ヨーロッパ原産の帰化植物。
尚、春の七草で言うホトケノザはキク科のコオニタビラコ
のことで、そちらは在来種。



キランソウ (シソ科)

写真：2014-04-20

道端でよく見かける。草全体がロゼット状に地面を這うように生えている。



カタバミ (ムラサキ科)

写真：2012-10-16

シュウ酸を含んでいるため、噛むと酸っぱい。ヤマトシジミ(蝶)の幼虫が食草としている。



カキドオシ (シソ科)

写真：2014-04-20

薬草茶として利用されることがある。糖尿病によいとされている。シソ科特有の芳香がある。



スミレ (スミレ科)

写真：2013-03-26

“スミレ”という名のスミレ。府中事業所にはスミレとタチツボスミレがある。



ハルジオン (キク科)

写真：2013-04-13

北アメリカ原産の帰化植物。
ヒメジョオンに酷似。ハルジオンは茎を抱くように付くが、ヒメジョオンの葉は茎を抱かない。また茎を折ると、ハルジオンの茎は空洞だが、ヒメジョオンの茎には空洞がない。



タチツボスミレ (スミレ科)

写真：2014-3-31

全国どこでもごく普通に見られるスミレ。
春の花だが、秋の小春日和にも咲く。



ヒメジョオン (キク科)

写真：2012-07-09

ハルジオンに酷似。ハルジオンより開花時期が遅い。



サルトリイバラ (サルトリイバラ科)

写真: 2015-04-19

刺と葉柄の巻きひげで樹木などからみついで茎を伸ばす。ルリタテハというチョウの幼虫の食草。



ホタルブクロ (キキョウ科)

写真: 2012-06-13

風情があり、山野草としても栽培される。府中事業所では竹林で見られ、紫花と白花がある。



カラスノエンドウ(ヤハズエンドウ) (マメ科)

写真: 2015-4-19

春から初夏にかけて、赤紫色の花を咲かせる。よく似たスズメノエンドウは、花が白紫色で長さ4 mm前後と小さい。



キツネアザミ (キク科)

写真: 2013-05-23

キク科ではあるがアザミ属ではなく、キツネアザミ属。アザミのようなとげは無い。草丈: 50~90cm。



キュウリガサ (ムラサキ科)

写真: 2015-3-29

直径3 mmのごく小さな空色の花を咲かせる。茎や葉を揉むと胡瓜(キュウリ)に似た匂いがするというのが名の由来。



ヤセウツボ (ハマウツボ科)

写真: 2013-05-16

地中海沿岸原産の帰化植物。葉緑素を持たず、マメ科やキク科の植物に寄生する。



ナガヒナゲシ (ケシ科)

写真: 2013-03-26

地中海原産の帰化植物。ヨーロッパでは地中海沿岸の岩場に咲くと言うが、日本では駐車場や線路脇の石がごろごろしている乾燥した荒地を好む。



ネジバナ (ラン科)

写真: 2012-06-13

別名モジズリ。小さいながら、蘭らしく優雅な形をしている。芝生のいたるところで見られる。右巻き、左巻き、濃いピンク、淡いピンクなど個体差が楽しめる。



マツバウンラン (ゴマノハグサ科)

写真: 2014-04-20

北アメリカ原産の帰化植物。花期4~6月。路傍、グラウンド、人家周辺、荒地などに多い。



(2011-6-10)



ツクサ (ツクサ科)

写真: 2012-06-25

梅雨のころに咲き始める。古くから青の染料として使われている。

ニワザキショウ (アヤメ科)

写真：2012-06-4

紫花と白花がある。北アメリカ原産の帰化植物。



カラスビシャク (サトイモ科)

写真：2012-07-04

半夏 (はんげ) という生薬になる。
ムカゴができる。

ナワシロイチゴ (バラ科)

写真：2012-07-09

日当たりのよい道端に生える木イチゴ。
実はジャムにして食べられる。

実 (2012-07-09)

コヒルガオ (ヒルガオ科)

写真：2012-06-10

花期 6～8月。
葉が、ウマノスズクサに似るが、葉の先が尖っている。

ユウゲショウ (アカバナ科)

写真：2012-05-28

北アメリカ原産の帰化植物。明治時代に渡来。
花期 5～9月。

シロツメクサ (マメ科)

写真：2014-7-19

どこにでも良く咲き、虫たちにも大人気。



ワルナスビ (ナス科)

写真：2012-06-01

北アメリカ原産の帰化植物。
府中事業所中で繁殖している。
繁殖力が強く、根絶させるのが困難。
毒性がある。
要注意外来生物 (外来生物法)。

アカツメクサ (マメ科)

写真：2014-5-25

どこにでも良く咲き、虫たちにも大人気。



ママコノシリヌグイ (タデ科)

写真：2012-07-09

やや湿り気のある林縁や道端などに生える。茎に棘がある。

セリバヒエンソウ (キンポウゲ科)

写真：2011-06-10

中国原産の帰化植物。



ヘクソカズラ (アカネ科)

写真：2012-08-01

葉を揉むと臭気がする。



クズ (マメ科)

写真：2012-09-21

秋の七草の一つ。
様々な昆虫のつく植物でもある。
府中事業所でもよく見かけるウラギンシジミの幼虫の食草でもある。



ヤブガラシ (ブドウ科)

写真：2013-07-16

生命力が強く、至る所に繁殖している。つる植物で、他の植物やフェンスに絡みつく。



ツルボ (ユリ科)

写真：2012-09-21

草地に見られる秋の花。
ツルボの開花が早い年は彼岸花の開花も早いと言われている。



オオアワダチソウ (キク科)

写真：2012-07-09

北アメリカ原産の帰化植物。秋に咲くセイタカアワダチソウに良く似ているが、花期は7月～9月。
日本の侵略的外来種ワースト100/要注意外来生物



ナンテンハギ (マメ科)

写真：2013-10-19

マメ科の多年草。草原や林縁に生える。葉がナンテンに似ている。



セイタカアワダチソウ (キク科)

写真：2012-10-25

北アメリカ原産の帰化植物。花期は10月～11月。
日本の侵略的外来種ワースト100/要注意外来生物



ツリガネニンジン (キキョウ科)

写真：2013-10-19

キキョウ科の多年草。葉は茎に3-5枚輪生する。草原や林縁に生える。秋の草原と言えば本種を思い出す人も多いはず。



コセンダングサ (キク科)

写真：2012-11-08

北アメリカ原産の帰化植物。適応力があり、どんな土壌でもよく育つ。種は、洋服にひっつくことで知られる。
要注意外来生物。



種はひっつき虫の呼び名を持つ



ナガイモ (ヤマノイモ科)

写真：2013-10-19

中国原産の帰化植物。
ヤマノイモ科の似た仲間が多いが、葉が対生するのは、ヤマノイモ、ナガイモ。
葉が互生するのは、ニガカシュウ、オニドコロ。
オニドコロには、むかごはできない。



キカラスウリ（ウリ科）

写真：2014-11-30

事業所内ではカラスウリとキカラスウリが見られる。



ノブドウ（ブドウ科）

写真：2013-11-9

つる性の植物。実は薄い緑色、紫色、空色など変化に富む。



エノコログサ各種（イネ科）

写真：2014-10-19

別名ねこじゃらし。種類によって花穂の色は様々。



クヌギの幼木（ブナ科）

写真：2012-10-03

落葉樹林（北の森公園）では、ドングリから発芽したクヌギの幼木が多数見られる。
事業所の落葉樹林は、萌芽更新による若返りがされておらず、老木がほとんど。



エノキの幼木（ニレ科）

写真：2012-10-29

府中事業所内のあちこちで幼木が見られる。
多くの昆虫の食樹であり、木の実は鳥に好まれる。
葉っぱが左右非対称。



コフキサルノシカケ (マンネンタケ科)

写真：2014-8-31

寄生木の種類によって姿形、色をかえる。多年生で年々成長する。



ヒトヨタケ (ヒトヨタケ科)

写真：2015-8-29

白色から紫灰色に変化し、最後は黒ずんで裂けていく。



スエヒロタケ (スエヒロタケ科)

写真：2014-11-30

世界でも最も一般的なキノコの一つ。



ヤマイグチ (イグチ科)

写真：2014-11-30

食用可能



ヒイロタケ (サルノシカケ科)

写真：2014-11-30

きわめて普通にみられる広葉樹生のキノコ。



マンネンタケ (マンネンタケ科)

写真：2015-6-27

霊芝 (レイシ) とも言われ、薬効が高いとされ、民間薬や健康食品に用いられる。



アミガサタケ (アミガサタケ科)

写真：2015-04-19

フランスではモリーユ茸、イタリアではスプニョーラ茸と呼ばれ、ヨーロッパでは人気のある春の高級食材。栽培ができないので、入手困難。



ヒメツチグリ (ヒメツチグリ科)

写真：2014-11-30

外皮が反り返り星形に見える。ツチグリは英語で "earth star"。



ササクレヒトヨタケ (ヒトヨタケ科)

写真：2015-04-19

ヨーロッパで一級品の食材として扱われている。栽培は難しいが、一部では人工栽培に成功し、コプリヌという名前で販売されている。



フミツキタケの仲間 (オキナタケ科)

写真：2015-04-16

フミツキタケの仲間と推測される。



クラモノジャガイモタケ (ジャガイモタケ科)

写真：2014-11-30

名前の通り、ジャガイモもしくは石に見える。



割ると断面の色が変化する



タマゴダケモドキ (テングダケ科)

写真：2014-11-30

猛毒。



オオシロカラカサタケ (ハラタケ科)

写真：2012-09-26

熱帯性のキノコ。有毒。



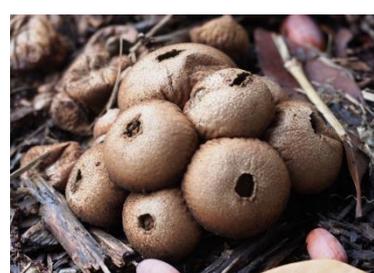
幼体



ノウタケ (ハラタケ科)

写真：2014-11-30

幼菌は白色。



ホコリタケ (ハラタケ科)

写真：2014-11-30

成熟すると、頂部に開いた孔から胞子が煙のように噴出する。

写真は成菌だが、幼菌は白い。



エノキタケ (キシメジ科)

写真：2015-01-24

広葉樹の枯れ木や切り株に寄生する。食用になる。加熱すると粘りが出る。



キツネノエフデ (スッポンタケ科)

写真：2014-11-30

先端のグレバから臭気をだし、ハエなどの昆虫を呼び、胞子を散布させる。



カニノツメ (アカカゴタケ科)

写真：2014-11-30

ツメの間に液状のグレバをつけ、臭気でハエなどの昆虫を呼び、胞子を散布させる。



幼体の断面

粘液化したグレバ



サンコタケ (アカカゴタケ科)

写真：2014-11-30

グレバから臭気をだし、ハエなどの昆虫を呼び、胞子を散布させる。地上部の突起は3～5本に枝分かれするが、先端部は結合している。

府中事業所の水辺ビオトープ

2012年3月に、構内の北西緑地に、長さ6m、幅2mほどの小さなひょうたん型のトンボ池を作りました。従業員が穴を掘り、ホームセンターで売っているビオトープシートを敷き、土を入れて作った手作りのトンボ池です。水は、ミネラルたっぷりの井戸水をひいています。



2月22日撮影



3月2日撮影



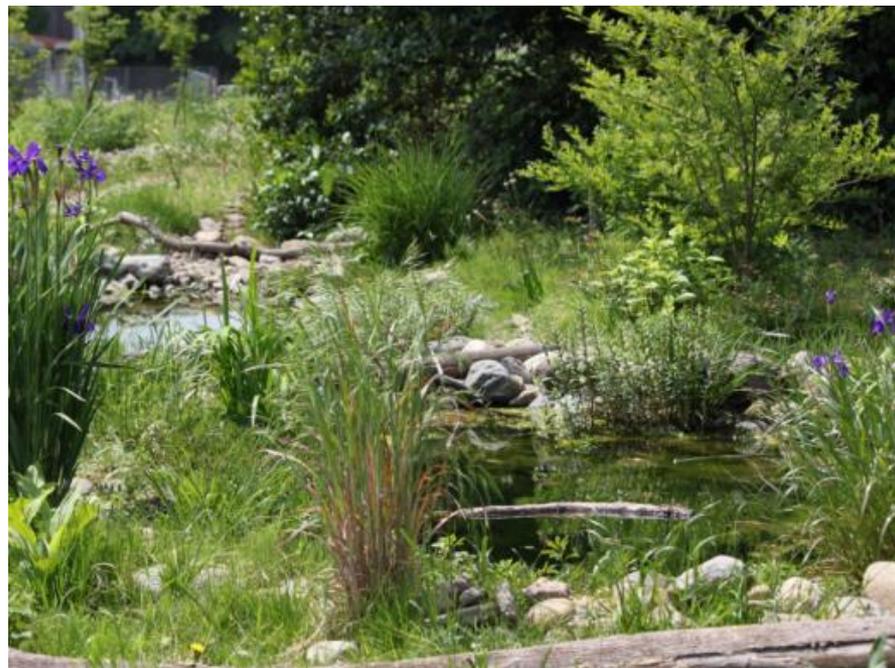
3月15日撮影

一番最初のお客様は、3月に現れたキタテハ。石の上で日向ぼっこをしていました。その後、池にメダカを放しましたが、いつのまにか子メダカがたくさん現れ、順調に個体数を増やしていきました。いつの間にか、アメンボもやってきました。



トンボ類で最初にやってきたのは、5月中旬のクロスジギンヤンマ。7月頃からは、ショウジョウトンボ、ウスバキトンボ、シオカラトンボ、オオシオカラトンボが次々現れ、池に産卵しまくっていました。7月の終わりにはクロスジギンヤンマのヤゴ、8月には赤トンボのヤゴを確認しました。8月の終わりには、待望のイトトンボが2種、飛来しました。夏の終わりから秋にかけて、ギンヤンマ、アキアカネ、ミヤマアカネが姿を見せ、トンボ池は初年度から大いに賑わいました。キジバト、ムクドリ、スズメ、メジロなどの鳥たちも、水浴びや給水に頻りに訪れています。

2年目の2013年には、4月中旬からシオカラトンボが羽化し始め、6月には初の水鳥となるカルガモが飛来しました。2015年にはコサギが飛来するようになりました。



シオカラトンボの交尾
(2012-8-23)



ヤゴ(2012-8-29)



ヤゴ抜け殻(2012-10-12)



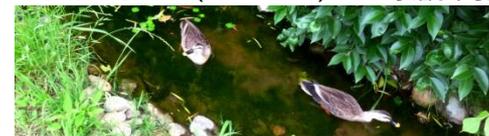
水を飲むキジバト
(2012-5-28)



水浴びするムクドリ(2012-5-16)



水浴びするメジロ(2013-2-1)



カルガモのつがい
(2013-6-19)

新しい緑地の整備

生き物をもっともっと増やそうと、新しい緑地をコツコツとつくっています。数年後の成果が楽しみです。

クヌギ・コナラ植林地 (北西角地)



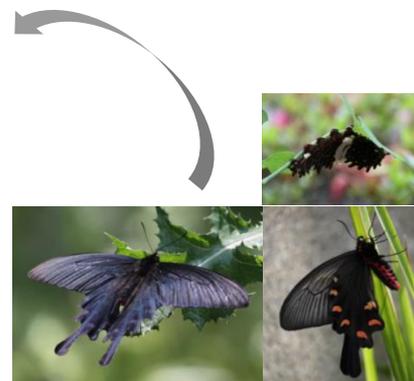
近隣小学校の生徒さんに植林のお手伝いをしていただき、これまでに数百本のクヌギやコナラ、榎の木などを植樹しました。十数年後には、見事な雑木林ができるかな！？

来てくれるか！？



今、府中事業所にはいない生き物たち

ウマノズクサ・ガーデン (藤棚の下)



ジャコウアゲハ (構内の芝地)

ウマノズクサの保護区をつくりました。まずは、花が咲く大株を育てます！構内の芝地には、いたるところにウマノズクサが生えていますが、草刈りの度に地上部を刈られてしまう為、大きくなりず、花の咲く株がほぼありません。(地上部は刈られても、根っこが残っていれば再生します)



浜川崎工場への ウマノズクサの移植

多摩川由来の遺伝子を持つ府中事業所のウマノズクサを、2013年春に、多摩川河口域にある東芝浜川崎工場へ移植しました。ジャコウアゲハの生息域が広がっていくことを願っています。



ミニコラム 府中の住人からのメッセージ

東芝府中事業所で、生物多様性保全に取り組んでいる担当者の思いです！

府中事業所 施設管理部 環境担当
春山 信治 さん

私達が子供の頃、原っぱや道端、庭などで蝶やバッタを追いかけたり、アリの行列を見たり巣を観察したり、その生態に興味を持った記憶があると思います。しかし、道路舗装が進み、住宅地や商業地などの増加により、それまでの自然が減少してきていると感じていると思います。私達は生活が豊かになっていく反面、地球温暖化や野生生物の種の減少など地球環境問題を生じていることを忘れてはいけません。

府中事業所では社会インフラを支える製品を作り出す一方で、地域の自然と調和する事業所を目指して緑化整備を行っています。地域本来の樹種を植樹したり、水系や草地のビオトープを構築するなど事業所の森づくりを推進し、生物種の観察を行っています。

将来、鳥や昆虫など自然との共生が実現できるよう、緑のネットワークを構築する中継点として機能できることを願っています。



東芝の府中事業所に通う従業員の中には、仕事では社会インフラ事業に携わりながら、自然観察指導員の資格を持ち、150万本の森づくりなどの社会貢献活動を続けている人たちがいます。日頃から、多種多様な生き物と深い関わりを持って活動している自然観察指導員が、東芝府中事業所の自然や、東京の自然、生物多様性について、メッセージを書いてくれました。

府中事業所 電力・社会システム技術開発センター
田中 久男 さん（自然観察指導員、NPO法人「森と人のネットワーク」※代表）

府中事業所には多くの自然があります。この自然へのアプローチには、「親しむ」→「知る」→「守る」という流れがあり、そのなかでも、「親しむ」ことがいちばん大切だと思います。そして「親しむ」ためには、「五感を使って自然を感じる」「身近なものにこだわる」ことが重要です。

この、自然を守り、生態系を守ることは、生物の多様性を守り、地球環境を守ることに繋がると思います。

ぜひ身近な職場のまわりにこだわり、今まで見えなかった自然を感じてはいかがでしょうか。きっと府中事業所が今まで以上に好きになるでしょう。

※NPO法人「森と人のネットワーク」とは

当社従業員で自然観察指導員の資格を持つ従業員たちが結集して立ち上がった団体であり、150万本の森活動として、当地で整備を自らの手で行う他、都民・従業員が参加して開催される観察会・見学会のナビゲーター役も務めています。



ミニコラム 府中の住人からのメッセージ

府中事業所
技術管理部 知的財産担当駐在
岡嶋 佐保里さん（自然観察指導員、NPO法人「森と人のネットワーク」会員）

東京湾の海拔0mから東京都最高峰の2017mの雲取山まで、ビルに囲まれた街から豊かな自然の広がる森まで、東京都は地形も風景も自然も、とてもバラエティーに富んでいます。

生物多様性という言葉は難しいようですが、簡単な事から始められますよ。例えば、自然を観察することはちょっとした一歩。空や足元を眺めることから始まります。

府中事業所には野鳥がたくさんいて、時には上空をタカの仲間が通過したりします。足元にはカントウタンポポという在来種のタンポポが生え、そして様々な種類の蝶や昆虫がいます。さらによく見ると小鳥の羽が落ちていたり、モグラ塚があったりします。また、夜にはタヌキやハクビシンがひっそり歩いていることもありますよ。

このように私たちの身近なところにも小さな自然、命がたくさんあります。通勤途中、建屋の移動中などに、時折周りを観察してみてくださいね。



府中事業所
交通ドライブシステム部
高木 晴彦 さん（自然観察指導員、NPO法人「森と人のネットワーク」会員）

私たちが東芝府中事業所で生み出している製品は、派手さは有りませんが『地道に・でもしっかりと・確実に』社会基盤を底辺で支える重要な使命を持った機器として、日本国内のみならず世界中に数多く送り出され、社会の安全・安心に貢献しています。

その様な生産活動を行っている、我々の事業所には沢山の種類の動植物や昆虫も共に生きており、生産活動とは全く別の側面で大きな貢献をしています。事業所内でしっかりと生きている 彼らは、武蔵野の台地にあつて生態系ネットワーク維持の一翼を担い『地道に・でもしっかりと・確実に』このネットワークを支え、都市部における「生物多様性」の維持に貢献しているのです。

私たちは、先人から引き継いだ「生産工場としての府中事業所」と「生物多様性に貢献する府中事業所」を『地道に・でもしっかりと・確実に』これからも大切に残し、次の世代へ途切れることなく引き継いで行くことが出来たら良いなと考えています。



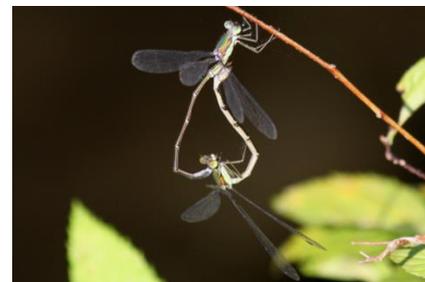
いつかは来てくれるかな!?

府中事業所にはいない生き物たち



アカゲラ
府中事業所から北へ400mの
ところにある武蔵台公園にいました！
府中事業所には、コゲラはたくさんい
ますが、アカゲラはいません。

オオアオイトトンボ
府中事業所から西へ4kmのと
ころにある矢川緑地にいました！ 府
中事業所には、日向を好むトンボ
ばかりで、木立ちを好むトンボがい
ません。



ルリビタキ
府中事業所から東へ2.5km
のところにある浅間山にいました！
浅間山には、他にも、アオゲラやキク
イタダキ、センダイムシクイなど、府中
事業所にはいない鳥がたくさんいま
す。

クロハナムグリ
浅間山にいました！
成虫は花に集まり、幼虫は朽木を食
べます。

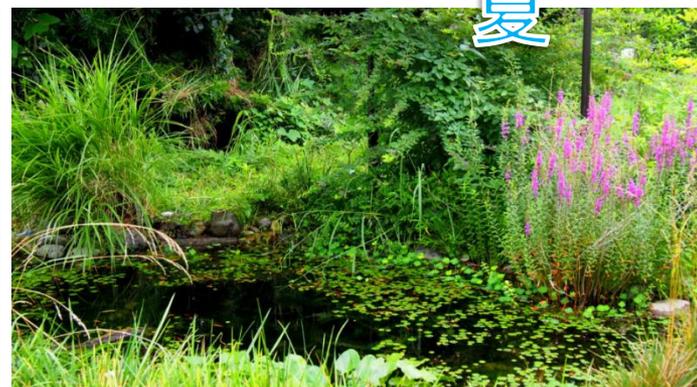


トラフシジミ
浅間山にいました！
浅間山には、他にも、アカテハなど
の蝶、コクワガタ、カミキリ虫などの甲
虫類など、府中事業所にはいない
昆虫がたくさんいます。

多摩川にいる大型のキリ
ギリスやクマバッタなども、
府中事業所では見られ
ません。

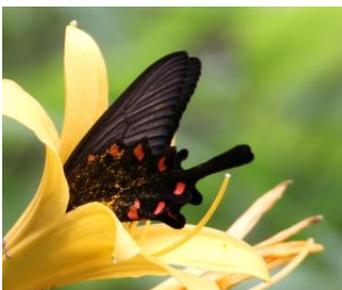


府中事業所の四季



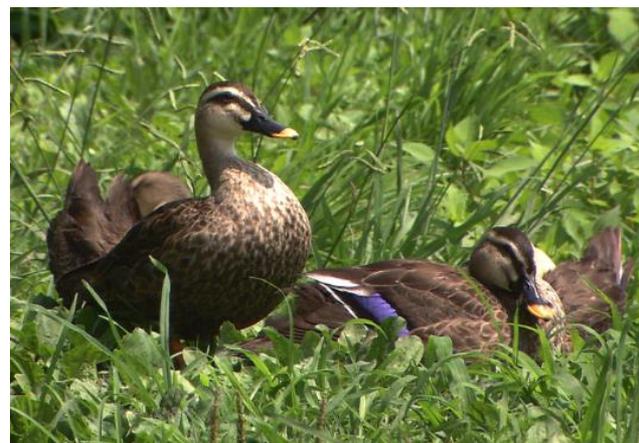
次世代に残したい宝物 府中エリアの癒しスポット (1)

浅間山



次世代に残したい宝物 府中エリアの癒しスポット (2)

矢川緑地



東京都の未来を想像してみよう

東京都の端には、自然の豊かな西多摩地区がありますが、都心に近づくほど、緑は少なくなります。しかし、見回してみると、公園や緑地が点在していることに気が付きます。

このわずかに残された貴重な緑地をベースとし、**エコジカル・ネットワーク（緑の回廊）**を築いていくことで、東京に、今よりも、もっとたくさんの生き物が行き来するようになります。

豊かでより魅力的な街に変化する東京を、みんなで想像してみませんか？





都会の自然が面白い!



本資料は、東芝インフラシステムズ(株) WEBサイト
「府中事業所いきもの図鑑」にて紹介中です。
<http://www.toshiba.co.jp/cs/company/csr/management/fuchu.htm>



発行：東芝インフラシステムズ(株) 府中事業所

2013年3月15日作成
2016年12月15日改訂
2017年7月1日改訂